『保元物語』における〈理〉と〈哀〉

――『平治物語』『平家物語』と比較して――

阿部日菜子

はじめに

保元元年（一一五六）の保元の乱を題材にした『保元物語』には、「理（ことわり）」という言葉が目立つ。実際に数えてみると、半井本『保元物語』文中に「理（ことわり）（道理）」という言葉は一二例ある。[注1] 用例数だけをみれば、それほど多く出現しているわけではない。しかし、それでも『保元物語』の「理」が読者に強い印象をもって響いてくるのは、この言葉が物語にとって非常に重要な局面で用いられているからだと考えられる。たとえば、次のような場面がある。

①久寿二年七月廿三日、ハカラザルニ近衛院カクレサセ給ヌ。御歳十七、惜カルベキ事也。法皇・女院ノ御歎ナノメナラズ、申モ愚ナリ。新院、此ヲリヲヱテ、「我身コソ位ニ不レ被レ付トモ、重仁親王ハ、今度ハ位ニハ遁ジ物ヲ」ト待ウケサセ給ケリ。天下ノ諸人モカク思ケル所ニ、ヲモヒノ外ナル美福門院ノ御計デ、後白河院ノ四宮トテウチコメラレテ渡ラセ給シヲ、位ニ付奉セ給。高キモ賤モ、誠ノ親ナラヌ御隔ニテ、女院角被二思食一ケル。新院トハ一ツ御腹ニテワタラセ給シカドモ、女院モテナシ奉リ、法皇ニモ内々コシラヘ申サセ給ケルトゾウケ給ル。是ニヨリ、新院御恨一入ゾマサラセ給ゾ理ナル。

（上巻「後白河院御即位ノ事」六頁）

①は、崇徳院（新院）が恨みを募らせ、後に始まる保元の乱を予感させる場面である。この章段において崇徳院は二つの恨みを抱えている。一つは崇徳院自身が半ば無理やり退位させられたこと、もう一つは息子の重仁親王が即位できず、崇徳院が政治の実権を握ることができなかった、ということである。引用部は特にその二つ目の恨みを抱く過程が語られており、その評語として「理ナリ」が用いられている。そのため、語り手は崇徳院が恨みを抱いたことに関しては同情的であり、恨みを持つこともっともである、と肯定している。『保元物語』の展開として、この時に崇徳院が抱いた恨みが発端となって保元の乱が起こることになる。よって、この時点で語り手が崇徳院の恨みを「理」と認めているということは、『保元物語』全体に関わっていく問題だといえる。

②（為朝が頼長に夜討ちを提案するが却下されて）御前ヲ立テ歩出トテ、「夜ノ明ケンヲ待セ給ハン事、御方ノ軍兵ノカサヲ敵ニ見セサセ給ハンタメカ。軍セン事、如何アランズラン。義朝ハ合戦ノ道、奥義ヲ極タリ。明日マデノバサバコソ、信実、玄実ヲモマタセ給ハメ。悲哉、只今敵ニヲソワレテ、御方ノ兵アワテ迷ハン事ヨ」トゾツブヤキテゾ出ケル。京中ニハ、貴賤上下皆〳〵ノ、シリテ、「今夜、合戦アルベシ。如何アランズラン」ト、サハギ迷ケルモ理ナリ。

（上巻「新院御所各門々固メノ事付軍評定ノ事」三三～三四頁）

②は崇徳院方の軍議の場面である。源為朝は、藤原頼長に戦の方法を問われて「夜討ち」を進言したものの却下されて憤慨する。その際の頼長の主張は、崇徳院方は人数で劣っているため、味方の僧兵が到着する明け方を待ってから戦を仕掛けるべきだ、というものである。それと合わせて、天皇と上皇の戦いなのだから夜討ちという野蛮な方法はするべきではない、と為朝に発言している。つまり、開戦するのは早くても明朝、と頼長は考えている。だが、同じ頃に後白河院方でも源義朝が夜討ちを提案していた。結果、そちらは実行して勝利を収めることになる。そのため、ここで為朝が提案した夜討ちを実行しなかったことが、崇徳院方が敗北する大きな原因として語られていることがわかる。

②で「理ナリ」とされている内容は、市中の人々が「今夜、合戦アルベシ」と騒ぎ合い、どうしたらいいかと話し合っていることについてである。ここで注意したいのは、戦に直接的に関わっているわけではない市中の人々でさえも「今夜」合戦が行われる、と話している点である。このことによって、様々な理由から夜討ちをするべきではない、という判断を下した頼長一人が「明日」戦いが始まると思っていることが際立ってくる。その上で、語り手が「今夜」合戦が行われるだろうという人々の予想（あるいは推測）を「理ナリ」と認めている。よって、結果として「夜討ちをしない」という決断をした頼長一人に敗戦の責任が重くのしかかってくることになる。

さて、①②の「理」をみると、どちらも「理」に「ナリ」が下接しているが、『保元物語』にみられる「理（道理）」の用例を分析した結果、その意味内容によって上述の一二例を二通りに分けることができる。

（一）「生者必滅ノ理」等、「～の理」として語句が成立するもの
（二）「理（道理）」に「ナリ」が下接して形容動詞となるもの

（一）は、たとえば「生者必滅ノ理」「有為ノ理」といった形で使われる。そのため、語り手の独自な、あるいは主体的な解釈が入り込む余地が無い。どのような人々からみても「生者必滅ノ理」といった場合には大般涅槃経が示すこの世の真理であることがわかり、「理」が示す意味内容を勝手に変えることはできないからである。よって、「生者必滅ノ」「有為ノ」というような言葉に修飾された「理」は語り手の意思や考えが含まれた言葉であるとはいえず、語り手の主体性がみられない。

対して、先に引用した①②を含む（二）は「ナリ」が続くことで主張・陳述の意味が強まる。これにより、一連の場面が「理ナリ」と結ばれることによって、その出来事や登場人物に対する語り手の「立場」や「視点」が明確になると考えられる。このことから、語り手の言葉として「理ナリ」が出てきた場合、そこで主張されている「理」は語り手の意思や考えによって判断されたもの、といえる。

（二）のように「ナリ」が下接した「理」が語り手の意思を十分に反映した言葉である、という前提で用例をみていくと、物語の展開に大きく関わる場面でこの言葉が用いられているのではないか、ということが浮かび上がってくる。そして、とある事柄に対して語り手が「理ナリ」と認めることは、語り手がその「理」の対象に寄り添った考えを示している、ということになる。したがって、「理ナリ」と語り手が表現した場合、その内容は語り手の主観を少なからず伴い、物語の展開や解釈に大きく関わる、という仮説が生まれる。つまり、（二）の「理」は『保元物語』のテーマに関わっていく重大な言葉だと考えられる。

たとえば、先程引用した①では崇徳院が恨みを募らせたことを「理ナリ」としていたが、このことによって崇徳院が恨みを抱くという行為自体に正当性が生まれる。よって、乱の発端となった恨みを語り手が認める、ということは『保元物語』の崇徳院自身に対して語り手が同情的に捉えている、ということに繋がる。

②では、先述したように崇徳院方の敗戦原因が問題となってくる。虚構ではなく、確かな歴史的事実として今に伝えられる戦を題材にしている軍記物語にとって、「勝敗」、とりわけ「敗戦」の理由というものは非常に重要だと考えられる。実際には様々な要因が絡み合って崇徳院方の敗戦を招いたことが察せられるが、『保元物語』では頼長一人に責任が押し付けられているように思われる。崇徳院方の「判断」という面においては頼長が全面に押し出されている、といってもよいだろう。少なくとも『保元物語』においては、頼長に敗戦責任がすべてのしかかっており、歴史的事実として責任を負うべきはずの誰かが語り手によって意図的に隠されている。これは『保元物語』が物語である所以であり、語り手の物語構想が絡んでいるように思われる。そのため、崇徳院方が負けたことの理由づけの一部として、「理ナリ」が用いられていることは決して見過ごすことができない点である。

このように、『保元物語』中における（二）の「理」は、物語にとって重大な意味を持つ言葉だと考えられる。よって、本稿では『保元物語』の「語り」における「理」について考察を行い、その特徴を明らかにしていきたい。

なお、「理ナリ」より数は少ないものの、「理哉」、「理ヤ」というように「理」に詠嘆の意味を持つ助詞が接続する場合がある。これらの言葉を用いる際、語り手は「理」と判断したことに対して何らかの強い感慨を持っていると思われ

るため、「理ナリ」とほぼ同義であると考える。また、「道理」という言葉も『保元物語』には数箇所みられるが、意味として「理」と差異はそれほどみられないため、「也」が接続した場合は「道理」も「理」と同様である、と解釈しておくこととする。

以上、本稿で扱う「理」についてまとめると、（二）の定義は、「理（道理）」に「ナリ」が下接して形容動詞となるもの（哉（カナ）、ヤ等の助詞が接続するものを含む）、となる。すなわち、本稿の考察対象となる「理（道理）」は語り手の「主観」「立場」「視点」が明確であるもの、ということができる。よって、以後、本稿では（二）の「理ナリ」を〈理〉と表記し、他の「理」と区別して扱っていくこととする。

ところで、〈理〉と同様に『保元物語』の評語として扱われる言葉としては「哀れ」が挙げられる。一見、規範意識や道徳意識を指す「理」と、何らかの感慨・感情を表す「哀れ」は対極にある言葉のように思われる。しかしながら、〈理〉がその対象とする人物に対して語り手の同情や共感を示す言葉であるとするならば、「哀れ」と〈理〉は似た意味を示している、という見方も可能なのではないだろうか。

文学作品における「理」及び「哀れ（あはれ）」についての研究は、『源氏物語』を扱った上地敏彦の論がある。上地は「『ことわり』は『道理』『教理』『法理』『論理』等を表し、美的理念たる『もののあはれ』と対峙する教戒的・観念的な内容を表す語とされている。それは善悪理非を必ずしも基準としない人間的感情・心情とは対極にあると見做すのが、殊に本居宣長以降の通念である」[注2]とした上で、「しかし果たして、『ことわり』は『もののあはれ』の対義語としての論点しか見出せないものなのだろうか」[注3]と疑問視している。そして、紅葉賀巻の「ことわり」の用例を検討し、「このもっともだという理解は、言うまでもなく知的・観念的理解などではなく、親心というものへの人間的理解であって、深い人間的共感ととらえることができる」[注4]と述べている。

上地は結論として、『源氏物語』の「ことわり」は言葉の背景と内容の違いによって以下の二種類に分類できるとする。

Ⅰ　教戒・観念的条理としての「ことわり」

「道理」「教理」「法理」「論理」等を表し、通常「ことわり」の典型とされて、「もののあはれ」と対峙的に取り沙汰されるものである。

Ⅱ　人情・心情的条理としての「ことわり」

人情・心情の脈絡として当然そうだろう、無理もないという、心理的必然性を感じさせる内実を有するものである。『源氏物語』において実際的に多用されており、小論において注目する、心情的な理解や人間的な共感を生み出す「ことわり」であり、「もののあはれ」と親和性の強いものが厳存する。(注5)

私見によれば、ここで上地が主張している内容は『源氏物語』のみならず『保元物語』にもあてはまるものなのではないか、と思われる。先述したように、『保元物語』における〈理〉と「哀れ」はそれぞれの言葉を述べた対象に同情や共感を示し、肯定する働きがあると考えられる。そこで、本稿では〈理〉と共に「哀れ」についても検討し、その特徴をみていきたい。

「哀れ」は『保元物語』中に一四例あり(注6)、これも「理」と同様に二つに分けられる。

（一）感動詞（間投詞）として用いられる「哀れ」

（二）感動詞以外の「哀れ」

「哀れ」についてもまた、「理」と同様の理由で（二）を扱う。（二）の例としては以下が挙げられる。

①同年夏六月十二日、美福門院、成菩提院ノ御所ニテ御カザリヲオロシ、御カタチヲヤツサセマシマス。是ハ先帝モ隠サセマシ〳〵ヌ、又、法皇モ御悩ヨクワタラセ給ハヌニヨリテ、御歎ノ余ニ思食立トゾキコエシ。哀ナリシ事也。御戒師ニハ三滝ノ上人観空ゾマイリケル。

（上巻「法皇崩御ノ事」八〜九頁）

①は美福門院が出家した理由を語ったものである。美福門院は自分の息子である先帝（近衛院）に先立たれ、夫である鳥羽院の病状も思わしくないことが原因となって出家に至ったことがわかるが、語り手はそれに対して「哀ナリシ事也」と感慨を述べている。語り手がこのように述べることによって、この場面は「哀れ」なものなのだ、という認識が読者に生まれる。また、美福門院の出家に「哀れ」という語り手の感情が表現されていることによって、この場面（出来事）の美福門院に対して語り手が同情を示し、寄り添っている、ということがわかる。そのため、①における「哀れ」は語り手の意思が反映されている、ということができる。

②（源為義が敗走する場面において）為義、サガス処ニハ無テ、坂本三河尻ノ五郎大夫景俊ガ許ニ隠テ居タリケルガ、十六日ニ、五十騎計ノ勢ニテ、三井寺ヲ通テ、東国ノ方ヘ趣キケルガ、運ノ極タル処ハ、為義、重病ヲ受テ、前後不覚ニ成ニケリ。温病トゾ聞ヘシ。馬ニ舁乗テ行ニ、兵共出来テ打留トスル上ヘ、大将軍ノ重病ナルヲ見テ、郎等等、皆ステテ逃失ヌ。子共六人ノ外、郎等四人ト雑色華沢一人残ケル。近江ノ蓑浦ニテ、船ニ乗ラントシケル所ニ、敵廿騎計懸出タリ。戦ニ不レ及、四方ヘ皆逃散ヌ。四人等ガ郎等モ落失テ無リケリ。イトゞ心細クゾ成ニケル。其ヨリ東近江ヘ至ラントシケレ共、身ハ病ヲ受ツ、其上、鈴香、不破関塞リヌト聞ヘケレバ、東国ヘ遁下ラン事モ難レ有。道ノ辺ニテ打落サレン事モ、命モ難レ捨、恥モ惜ケレバ、思返シテ、蓑浦ヨリ東坂本ニ帰付テ、黒谷ノ辺ニ忍テ居タリケルガ、雑色花沢ガ勧ニテ、天台山ニ登テ、月輪坊ノ竪者ノ坊ヘ行テ、ソコニテ為義出家シテケリ。栄花ト開ケシタモト、今黒染ニ成姿、哀也ケリ。

（下巻「為義降参ノ事」九一～九二頁）

②は源為義が出家する場面である。ここでは、源氏の棟梁である為義に伴う人物が少なくなり、進退窮まっている状況であることが、描写からわかる。その際、これまで華やかだった為義の着物が、出家したことで黒染の僧衣になってしまった。それを語り手は「哀也ケリ」と語り、同情・共感の意を示している。②に至るまでの場面を読んでいくと、敗戦という重い結果や道中を共にする人物が少なくなったこと、為義自身の病など、為義が「哀れ」であると感じられる部分は多々みられるように思われる。更に、出家の場面において評語として「哀也ケリ」を用いることで、一連の説話が「哀」であることが際立ってくると考えられる。この場面に至るまでの、特に敗走中の為義の描写は「弱者」という側面を語ることで一貫している。そのため、この場面においても語りの誘導がある、といえる。つまり、この場面における為義は「哀れ」な人物であるように描かれているように考えられる。

その上で、一連の評語において「哀れ」と結ばれていることにより、為義が「哀れ」であることに読者は一切の疑問も持たず、納得することができる。為義に対する語り手の共感・同情の念を、読者も共有している、ということである。この場面において語り手が述べる「哀れ」は、「語り」の誘導という行為をもって、為義の元に読者を接近させる効果があるのだと考えられる。

また、①②はどちらも登場人物（美福門院、為義）が「出家」したことについて「哀れ」と語り手が評している。これを「理（もっともだ）」とせず、「哀れ」と述べている点に注意してみれば、語り手は美福門院と為義が本来は出家すべき人物ではない、と考えている、ということになるだろう。出家せざるをえない状況に陥ってしまった人物はその場における「敗者（弱者）」として物語では扱われている、という解釈も可能なのではないだろうか。

一般に物語の語り手には様々な種類と立場がありうるが、『保元物語』の語り手は作中世界に対して俯瞰的な立場から物語を語っていると思われる。したがって、その語り手は作中の登場人物とは一定の距離がある。だが、その「語り」の中にみられる「哀れ」は、語り手の言葉としては登場人物の気持ちに寄ったもののように感じられる。「哀れ」

は〈理〉のように論理的な根拠に基づいて述べられる言葉ではなく、感情から生み出される言葉だからである。つまり、「哀ナリ」は「理」と比較すると語り手が登場人物に近い立場（視点）から語っている言葉だといえるだろう。よって、（二）の「哀れ」は語り手の意思が十分に反映された言葉だと考えられる。

なお、上述（一）の「哀」は感動詞、もしくは間投詞であり、現代語訳すると「ああ」となるが、半井本『保元物語』において、語り（地の文）に（一）の「哀れ」はみられない。他の諸本や軍記物語には若干数確認できるが、典型的な意味をもった言葉としては扱われていないように思われる。今回は、語り手が登場人物の行動・発言に関して発した「哀れ」に特に注目していくことが、本稿の趣旨に沿っているように考えられる。よって、今回扱う「哀れ」は（二）の「哀れ」と規定する。以後〈理〉と同様に、（二）の「哀れ」は〈哀〉と表記して他の「哀れ」と区別する。

さて、以上のように問題点を整理した上で、以下、特に断らない限り、〈理〉〈哀〉といった場合には本節で定義した意味で用いる。これは半井本『保元物語』以外の他作品を扱う場合も同様とする。

本稿の大きな目的は、『保元物語』の「語り」における〈理〉と〈哀〉についてその特徴を掴む、ということであるが、そのためにも、他の作品における〈理〉と〈哀〉の使われ方を比較する必要がある。そこで本稿では、まず最初に『保元物語』の〈理〉と〈哀〉がどのような場面を描いたものか、ということについて整理する。次に、保元の乱とほぼ同時代に起こった合戦を題材にとった『平治物語』『平家物語』との比較を行っていく。その上で、『保元物語』にみられる「理」と「哀れ」と特徴とは何か、ということを明らかにしていきたい。

本稿の目的は、さしあたり『保元物語』の〈理〉と〈哀〉の特徴を検討することにあるが、そうした考察は、最終的に『保元物語』がそもそも何を目的として生まれたものなのか、という「物語」の意図、あるいは意義の解明という、より大きな問題に繋がっていくはずである。そこで本稿では、半井本『保元物語』を中心に扱うこととする。半井本は、『保元物語』諸本の中でも最も古態を留めているとされているからである。

以下、本稿では特に断らない限り『保元物語』といえば半井本『保元物語』を指す。その本文は、栃木孝惟・日下力

他校註『新日本古典文学大系43　保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店、一九九二年七月）に拠る。引用後の括弧で示した数字はその頁数を指す。引用文における傍線は特に断らない限り筆者によるものである。原則として旧字体は新字体で表記し、当て字などの一般的ではないと考えられる読みを除いて振り仮名は省略した。

一、『保元物語』における〈理〉と〈哀〉

『保元物語』の〈理〉を整理すると、全一二例の内八例が今回の考察対象として扱うものとなる。[注7]この分布をみると、上巻に二例、中巻に五例、下巻に一例となっており、戦が収束して戦後処理が行われる部分になると〈理〉はあまりみられなくなることがわかる。

対して、同様の基準で〈哀〉をみると、考察対象は〈理〉と同様に八例であり、その分布は上巻に一例、中巻に二例、下巻に五例と〈理〉と対照的になっている。下巻に〈哀〉が多い理由としては、物語の展開上、作品が終結部に向かうにつれて親兄弟の処刑、敗者への厳罰といった悲しみが際立つ場面が増えてくるから、ということが挙げられるだろう。反対に、まだ戦が勃発していない冒頭部や合戦の場面においては、それほど悲哀感は物語の中に立ち込めてこない、ということが考えられる。この点においては、『平治物語』や『平家物語』も『保元物語』と同じ軍記物語であるため、同様のことがいえるのではないか、と思われる。

以下、本稿で扱う『保元物語』の〈理〉八例の概要を述べる。

①乱の発端

久寿二年七月廿三日、ハカラザルニ近衛院カクレサセ給ヌ。御歳十七、惜カルベキ事也。法皇・女院ノ御歎ナノメナラズ、申モ愚ナリ。新院、此ヲリヲヱテ、「我身コソ位ニ不レ被レ付トモ、重仁親王ハ、今度ハ位ニハ遁ジ物ヲ」ト待ウケサセ給ケリ。天下ノ諸人モカク思ケル所ニ、ヲモヒノ外ナル美福門院ノ御計デ、後白河院ノ四宮トテウチコメラレテ渡ラセ給シヲ、位ニ付奉セ給。高キモ賤モ、誠ノ親ナラヌ御隔ニテ、女院角被二思食一ケル。新院トハ

一ツ御腹ニテワタラセ給シカドモ、女院モテナシ奉リ、法皇ニモ内々コシラヘ申サセ給ケルトゾウケ給ル。是ニヨリ、新院御恨一入ゾマサラセ給ゾ理ナル。

（上巻「後白河院御即位ノ事」六頁）

前節において述べたように、①は崇徳院が恨みを募らせたことに〈理〉があるとしている。ここで崇徳院が抱いた恨みは保元の乱の発端となっていくものであるため、語り手が恨みを〈理〉としていることは極めて重大である。

②乱を前にして慌て騒ぐ人々の様子

（頼長に為朝が夜討ちを提案するが却下されて）御前ヲ立テ歩出トテ、「夜ノ明ケンヲ待セ給ハン事、御方ノ軍兵ノカサヲ敵ニ見セサセ給ハンタメカ。軍セン事、如何アランズラン。義朝ハ合戦ノ道、奥義ヲ極タリ。明日マデノバサバコソ、信実、玄実ヲモマタセ給ハメ。悲哉、只今敵ニヲソワレテ、御方ノ兵アワテ迷ハン事ヨ」トゾツブヤキテゾ出ケル。京中ニハ、貴賤上下皆〳〵ノ、シリテ、「今夜、合戦アルベシ。如何アランズラン」ト、サハギ迷ケルモ理ナリ。

（上巻「新院御所各門々固メノ事付軍評定ノ事」三三～三四頁）

②も第一節において触れたように、人々が「今夜」戦があると慌て騒いでいる様子に〈理〉がある、と語ったものである。この時点で、戦が始まるのは「今夜」ではない、と考えているのが頼長一人である、ということを如実に表した部分である。「今夜」戦が行われない、というのは、前の場面において頼長が却下した「夜討ち」と繋がっていく。夜討ちをしなかったことは崇徳院方の敗戦に直接結びついていく事項であるため、その判断を下した頼長に非がある、というように『保元物語』では語られている。すなわち②における〈理〉は、崇徳院方が何故敗戦したのかという、語り手の保元の乱に対する解釈に結びついていく〈理〉だと考えられる。

③義朝と為朝の問答

大庭平太、同三郎、山内須藤刑部丞父子、海老名源八、波多野次郎等、二百余騎ニテゾ追タリケル。宝荘厳院ノ西裏ニテ、返シ合テ戦ケリ。下野守、後陣ニ引ヘテ、「此ヲ禦ハ源氏カ平氏カ。カウ申ハ、今度ノ大将軍、下野守義朝」ト名乗ケレバ、取不レ敢、「同氏筑紫八郎為朝」トゾ申ケル。「サテハ義朝ニハ、遥ノ弟ゴザンナレ。何ニ、敵対シ、兄ニ向テ弓引者ハ、冥加ノ無ゾ。落ヨ。扶ケン」ト申ケレバ、為朝、カラ〳〵ト笑テ申ケルハ、「ヤ、殿、下野殿、兄ニ向テ弓引物ノ冥加ノ無ランニハ、父ニ向テ矢ヲ放ツ者ハ何ニ」トゾ申タル。道理ナレバ、音モセズ。

（中巻「白河殿攻メ落ス事」五七～五八頁）

③は、合戦中に相対した義朝と為朝の問答を描いたものである。義朝は弟である為朝に「サテハ義朝ニハ、遥ノ弟ゴザンナレ。何ニ、敵対シ、兄ニ向テ弓引者ハ、冥加ノ無ゾ」と、為朝が自らの弟であることを指摘する。義朝の言葉を聞いた為朝は、「兄ニ向テ弓引物ノ冥加ノ無ランニハ、父ニ向テ矢ヲ放ツ者ハ何ニ」と、義朝も父である為義と敵対している事実を述べて言い返す。義朝は為朝の指摘に〈理〉があると感じ、何も言えなくなってしまった、という場面である。ここで義朝と為朝が論点としているのは「親兄弟と戦うこと」、つまり「長幼の序」を問題にしている、という点である。このことは、以後『保元物語』中において何度も取り上げられる話題である。実際に保元の乱は親兄弟同士で戦った戦である。軍事行動を行った武士以外の皇族、藤原摂関家といった、乱の原因となった一族も親子間で対立しているためである。このような背景から、『保元物語』において親子間で敵対することについて何度も取り上げられていることがわかる。保元の乱（当時）の価値観、あるいは道徳観念を考えれば、子が親と敵対する、弟が兄に刃を向ける、というのは考えられないことだった。しかし、保元の乱においてその意識が崩壊する。『保元物語』で英雄的に語られる為朝の口から「兄ニ向テ弓引物ノ冥加ノ無ランニハ、父ニ向テ矢ヲ放ツ者ハ何ニ」という言葉が出てくるということは、旧来の意識を覆し、これまでの常識が通用しない世の中（つまりは「武者の時代」）の到来を暗示していると

も考えられる。いずれにしても、この場面は『保元物語』の語り手が保元の乱の特徴である「親兄弟と戦うこと」についての問題意識を明確にしている箇所である。

④勝敗の分け目

抑、今度合戦破ヌル事、王事不レ危、忝ク神明ノ御計ト覚タリ。公家殊御祈念深テ、日吉社ニ真筆御願書ヲ七条ノ座主ノ宮ヘ奉リ給ケレバ、座主御願書ヲ神殿ニ籠テ、肝胆ヲ砕キ祈請シ申サセ給ケル験ニヤ、為義、忠正ガ子共、命ヲ惜共見ヘザリケレ共、山王ノ御計ニヤ、無レ程敵ヲタイラゲラレン事、法験モ目出ク王威モ威シ。サレバ昔シ将門ガ東八ケ剋ヲ打取テ、都ヘ責上ルト聞シカバ、竜顔色ヲ失、人臣悉騒テ、諸寺諸社ニテ是ヲ調伏セシカ共、其験無リシニ、延暦寺ノ座主法性坊尊意僧正宣旨ヲ蒙テ、講堂ニシテ不動ヲ安置シテ、鎮護国家ノ法ヲ修セラレシニ、将門弓箭ヲ帯シテ炉壇ノ炎ノ中ニ影ハルト見テ、無レ程被レ打キ。両座主祈念答テ、二代ヲ護奉。目出事也。サレバニヤ惣持院ヲバ鎮護国家ノ道場ト申スモ理哉。

（中巻「朝敵ノ宿所焼キ払フ事」七六～七七頁）

④では、なぜ崇徳院方が保元の乱において敗北したのか、という理由について述べられている。ここで〈理〉とされているのは、惣寺院が鎮護国家の道場と呼ばれることになった、ということである。これは後白河院に先祖から伝わる神仏の加護があったことに繋がっていく一方で、負けた崇徳院には加護が無かった、ということを示す。つまり④の〈理〉は、そもそも崇徳院には勝ち目が無かった、ということを表現しているのであって、なぜ崇徳院が負けたのか、ということに対しての語り手の解釈が提示されている部分だと考えられる。

⑤憔悴する崇徳院

夜ニ入テ、家弘親子、新院ヲ肩ニ引懸奉テ、山ヨリ出シ奉テ、法勝寺ノ北浦ヲ過、北白川ノ東光寺ノ辺ニテ、光

弘ガ知タル人ニ輿ヲ借テ乗セ奉リ、「何方ヘカ仕ベキ」ト申ケレバ、「女房阿波局ガ許ヘ」ト被レ仰ケレバ、二条ヲ西ヘ大宮マデ仕。阿波局ガ許ヲ叩共、門ヲ閉テ音モセズ。「左京大夫ガ許ヘ」ト被レ仰ケレバ、其ヘ渡シ奉タレ共、教長卿モ、ケサ合戦ノ庭ヨリ何方ヘカ落行ケン、残留跡トテモヲダシカルマジケレバ、叩共、門ヲ閉テ人モ無シ。「少輔内侍ノ許ヘ」ト被レ仰ケレ共、ソコモ人モナシ。五畿七道広シトコソ思食然共、今ハ東西南北塞テ、御幸ナルベキ方モナシ。「コハ悲事哉。立宿ベキ方モ、今ハ無身ト成ヌル事ヨ」ト被レ仰、御心ヨワゲニ見ヘサセ給ゾ理ナル。

（中巻「新院御出家ノ事」七七頁）

⑥体力の限界が訪れる崇徳院

知足院ノ方ヘ渡シ奉テンゲルガ、知ヌ僧坊ヘ舁入奉ヌ。聽テソコデ平臥サセ給。山中ニテ水ヲキコシ食ツル外ハ、夜部ヨリ今マデ何ニモ進ネバ、御身ノヨハラセ給モ理也。

（中巻「新院御出家ノ事」七八頁）

⑤⑥は敗走する崇徳院がだんだんと衰弱していく様子を描いたものである。なぜ崇徳院がこのような状態に陥ってしまったのか、ということをしっかりと描写し、衰弱した様子をみせる崇徳院の姿を〈理〉と語り手が更に表現することで、読者もその認識を共有することができる部分だと考えられる。そのため、ここでの〈理〉は登場人物に対して同情や共感を表明して寄り添う〈哀〉と似た用法で用いられているように考えられる。

⑦勲功を求める義朝の直訴

義朝申ケルハ、「今度、勲功賞ニハ、卿相ノ位ニ昇共、難アルベキニアラズ。此官ハ、先祖多田満仲法師ガ始テ罷成テ候ケレバ、其跡芳ク候ヘ共、本、右馬助、今、権頭ニ転任、勲功ノ賞トモ不レ覚。更ニ無二面目一。朝敵ヲ討ツ

者ハ半国ヲ給ル。其功、世々ニ不レ絶トコソ承ル。父ヲ背キ、親類ヲ捨、兄弟ヲ離テ、御方ニ参リテ、命ヲ不レ惜責戦。勅命ニ背キ難ト云ヘ共、父ニ向テ弓ヲ引、矢ヲ放テバ、人ニ越タル不次ノ賞ヲコソ蒙候ベキニ」ト、頻ニ申バ、道理也ケレバ、隆季朝臣ノ左馬頭ナリシヲ、則左京大夫ニ移シテ、義朝ヲ左馬頭ニゾ被レ成ケリ。サテコソ憤ヲ休メケル。

（中巻「関白殿本官ニ帰復シ給フ事付武士ニ勧賞ヲ行ハル事」八一～八二頁）

⑦では、忠通に対して自分の働きに見合った勲功を与えるように直訴する義朝の姿が描かれている。ここで義朝が主張しているのは、自らが親に刃を向けてまで戦った、ということである。これは③でも述べたように、『保元物語』における親子関係の解釈に関わる〈理〉である。

⑧為義と別れる子供たち

サテサヨフケガタニ、山ヲ出テ、大竹ノ程ヲ過テ、水ノ御本ト云所ニテ、六人ノ子共、「最後ノ共シ終」トテ送ケリ。「今ハ、迎ノ者ハ近付タルラン。ワ殿原ハ返レ」ト宣ケレバ、「承ル」トテ、此人々ソコニ立止テ見送奉ラレケルガ、恩愛ノ道ハ不二力及一、思切レヌ事ナレバ、「今生一生ノ契ゾカシ。今者争見参セン」ト思フ限ノ別ノ悲シケレバ、「暫シ留ラセ給ヘ。可二申入一事ノ候ゾ」ト声々ニ被レ申ケレバ、「何事ゾヤ」トテ被二返登一ケリ。可レ云事ハ無レ共、別ノ悲サニ、父ヲ立囲テ、手足ニ取付テ、泣ヨリ外ノ事ゾナキ。理ヤ、サコソハ悲シカリケメ。後ニ相見ルベキ物ナレ共、指当ヌル別ハ悲ゾカシ。是ハ只今ヲ限レリ。二度可レ合別ナラネバ、悲共云モ疎也。

（下巻「為義降参ノ事」九四～九五頁）

⑧では、為義とその子供たち（後白河院方についた義朝を除く）の別れが描かれている。これは親子の今生の別れであり、お互いがそれを理解しているため、別れようにも別れられない、という場面である。そのため、ここでも問題に

なるのは親子関係である。また、この場面は「悲」という言葉が頻出するように、悲しい場面として語り手は語っていると考えられる。よって、この場面での〈理〉は「悲しさ」に対しての理由づけの効果もあると思われる。

〈理〉と同様に、〈哀〉八例についても、その概要を述べていく。

①美福門院の出家

同年夏六月十二日、美福門院、成菩提院ノ御所ニテ御カザリヲオロシ、御カタチヲヤツサセマシマス。是ハ先帝モ隠サセマシ〳〵ヌ、又、法皇モ御悩ヨクワタラセ給ハヌニヨリテ、御歎ノ余ニ思食立トゾキコエシ。哀ナリシ事也。御戒師ニハ三滝ノ上人観空ゾマイリケル。

（上巻「法皇崩御ノ事」八～九頁）

ここで〈哀〉と述べられているのは、美福門院が出家したことに対してである。美福門院の出家は「是ハ先帝モ隠サセマシ〳〵ヌ、又、法皇モ御悩ヨクワタラセ給ハヌニヨリテ、御歎ノ余ニ思食立トゾキコエシ」という理由だったことが語られている。その語りの直後に〈哀〉と述べられているので、息子の近衛院を亡くし、夫である鳥羽院の体調不良を嘆いた美福門院に対して、語り手が同情・共感していることがうかがえる。

②為義の出家

為義、サガス処ニハ無テ、坂本三河尻ノ五郎大夫景俊ガ許ニ隠テ居タリケルガ、十六日ニ、五十騎計ノ勢ニテ、三井寺ヲ通テ、東国ノ方ヘ趣キケルガ、運ノ極タル処ハ、為義、重病ヲ受テ、前後不覚ニ成ニケリ。温病トゾ聞ヘシ。馬ニ舁乗テ行ニ、兵共出来テ打留トスル上ヘ、大将軍ノ重病ナルヲ見テ、郎等等、皆ステテ逃失ヌ。子共六人ノ外、郎等四人ト雑色華沢一人残ケル。近江ノ蓑浦ニテ、船ニ乗ラントシケル所ニ、敵廿騎計懸出タリ。戦ニ不レ及、四方ヘ皆逃散ヌ。四人等ガ郎等モ落失テ無リケリ。イトゞ心細クゾ成ニケル。其ヨリ東近江ヘ至ラントシケレ

共、身ハ病ヲ受ツ、其上、鈴香、不破関塞リヌト聞ヘケレバ、東国へ遁下ラン事モ難レ有。道ノ辺ニテ打落サレン事モ、命モ難レ捨、恥モ惜ケレバ、思返シテ、蓑浦ヨリ東坂本ニ帰付テ、黒谷ノ辺ニ忍テ居タリケルガ、雑色花沢ガ勧ニテ、天台山ニ登テ、月輪坊ノ竪者ノ坊へ行テ、ソコニテ為義出家シテケリ。栄花ト開ケシタモト、今黒染ニ成姿、哀也ケリ。

（下巻「為義降参ノ事」九一～九二頁）

②は為義が出家に至るまでの経緯を描いた場面である。為義は保元の乱で敗戦した結果、連れる人も少なくなり、更には病を受けてすっかり弱ってしまった。かつて為義が源氏の頭領として栄華を極めた姿と比較して、語り手は〈哀〉と述べている。「哀れ」な為義の境遇をしっかりと描写することによって、〈哀〉という言葉に説得力が生まれている。これも読者に対する語りの誘導がみられる場面である。

③為義と子供たちの別れ

又、思切テ下レバ、子共呼返ス。子共返上バ、又、父呼返ス。サテシモ可レ有事ナラネバ、上下へ別行、子共ハ其ヨリ思々ニ落ゾ行ク。涙々トシテ行路前後ヲ不レ知。漫々トシテ漂心波引ヲ不レ弁。白楊ノ路モ何ヲ指テカ可レ尋。蒼梧ノ煙モ靡方ヲ不レ知。鳥ニアラネ共、四鳥ノ別ヲ致シ、魚ニアラザレ共、剣魚恨ヲ懐ク。欄干トシテ魂飛揚スト見ヘタリ。哀レ也シ父子ノ別也。二人三人モツレザリケリ。大原、静原、鞍馬ノ奥、貴布禰様ヘゾ別行。

（下巻「為義降参ノ事」九五～九六頁）

〈理〉⑧と同様に、為義と子供たちの別れを描いた場面である。別れようにも別れられない親子だったが、遂にそれぞれの道を行くことになる。一連の場面を総括して、語り手は「哀レ也シ父子ノ別也」と感慨を述べている。そのため、語り手はこの親子の別れを「哀れ」なものとして描こうとする意思があったことがわかる。これは〈理〉⑧の描写でも

うかがえることで、〈理〉⑧での〈理〉が「哀れ」という感情を前提にしたものように感じられる箇所でもある。〈理〉と〈哀〉の関係を考察する上では重要な場面であるといえよう。

④鎌田と波多野の問答

七条朱雀ニテ、車ヨリ輿ニ乗移ラセ奉ラン所ニテ、「不レ奉レ知テ、ヤハラ御頸ヲ可レ奉レ切」ト、鎌田ガ計ケレバ、波多野次郎ガ云ケルハ、「イカニ、鎌田殿。カヽル無レ情事ヲバ計申候ゾ。八幡殿ト、朝家ノ御護ニテ渡セ給判官殿ノ御座セバコソ、其子ニテ、殿ハ大将ヲモ承テ、朝恩ニモホコラセ給ヘ。父ノ御座セバコソ人共ソダ、セ給ヘ。何事ノ恨ノ御座トテモ、正シキ親ニツラク当リ給ベキ事ハ無物ヲ。然モ是ハ、公ノ敵ニ成セ給ヌレバ、互ニ御遺恨ヲ結バセ給ベキニアラズ。人ノ身ニハ一期ノ終ヲ以一大事トスルニ、ヤミ〳〵トシテ失奉バ、後生菩提モ徒ニ成セ給ベシ。此事ヲ顕シ申テ、仏ノ御名ヲモ唱ヘサセ進セタラバコソ、親子ノ情モ主従ノ哀モアランズレ。昔ヲ思バ、伊予殿、相模殿ト申シ時、仕レ始テ、其御子ニ八幡殿ヲ主ト頼奉テヨリ以来、八幡殿ノ御子ナレバ、入道殿モ我等ガ主、其御子ナレバ、頭殿モ我等ガ主、相伝ノ主ニ此事知セ奉ラザランコソ罪深ケレ。此事申テ、最後ノ十念ヲモ進奉バヤ」ト申バ、（後略）

（下巻「為義最後ノ事」一〇〇～一〇一頁）

④の〈哀〉は、語り手ではなく波多野の口から発せられたものである。他の〈哀〉はすべて語り手によるものなので、その点において④は他の例とは違う特質がある。また、文脈を考えると④の〈哀〉は所謂「哀れ」という感情を述べたものではないように思われる。これにより、④は他の〈哀〉とは違い、個別的な考察を行う必要があろう。

⑤自らの処刑を知らない四人の子供

波多野次郎承テ、五十騎計ノ勢ニテ、六条堀川ノ為義法師ガ宿所ニ行向。母上ハ物詣シテ無リキ。当腹ニ、十三ニ

成ル乙若殿、十一ニ成ル亀若殿、九ニナル鶴若殿、七ニ成天王殿トテ四人有ケルヲ、波多野次郎申ケルハ、「今日又、都ニ軍アルベシトテ、入道殿ハ船岡山ニ籠ラセ給テ候ガ、『君達、皆具シ進テ参』ト候ツル也。疾々御輿ニ奉ツレ」ト申セバ、四人ノ子共、今度ノ軍ノ後ハイマダ父ヲモ見ズ、出家トハ聞ケ共、替レル姿モ見ザリケレバ、呼ト聞ウレシサニ、我前ニ乗ラント、輿ノ中へ争イ入コソ無慙ナレ。道スガラモ、音々口々ニ、輿舁共ヲ、「遅シヤ〳〵」ト勧メケルコソ墓ナケレ。羊ノ歩ノ近付共、知ラザリケルコソ哀ナル。

（下巻「義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事」一〇六頁）

⑤は、為義の子供たちの中でも幼い乙若を始めとした四兄弟に関する場面である。四人の子供たちを連れ出す際、波多野は「今日又、都ニ軍アルベシトテ、入道殿ハ船岡山ニ籠ラセ給テ候ガ、『君達、皆具シ進テ参』ト候ツル也。疾々御輿ニ奉ツレ」という嘘をつく。この時点で為義は斬首されているので、為義が子供たちを呼ぶことはない。だが、それを知らない四人は喜び、自分たちの処刑場に向かっている輿を急かす。その様子に語り手は〈哀〉と述べている。

⑥乳母の嘆き

乙若申ケルハ、「アノ幼物共ノ髪ノ乱テ顔ニ懸リテ、暖ゲナルハ、押上テ、冷シゲニ結ヘ。頸ノアタリ汗巾ヘ。顔能巾ヘ。死テ後ハ、面能ク洗テ、髪能摩付テ、本結能シテ、左馬頭ニハ見セ申セ、義通。サスガニ我等ガキタナゲナラバ、片腹イタク思ハンズル」ト云ケレバ、四人子共ノ乳母共、皆一人ヅヽ付タリケリ。乙若殿ニハ源八、亀若殿ニハ五藤次付ク。鶴若殿ニハ吉田四郎付ク。天王殿ニハ内記平太トテ付テ、面々ニ有ケルガ、前々ニ舁居ヘテ、髪摩テ、高ク押上テ結、頸当リノ汗巾ケリ。是等ガ涙ノ勧メ共、幼人共ニ知セ進セジトテ、声ヲ頻ニ押ヘケリ。絶ヌケシキゾ哀ナル。

（同、一〇九頁）

⑥は四人の子供たちが処刑される直前の場面である。乙若は、自分たちが死んだ後の乱れたままの姿を義朝に見られたくはないと言って、それぞれの乳母に整えさせる。普段は日常の世話をしていた乳母たちが、今は子供たちが死に向かうための準備をしている。乳母たちはその現実に涙するが、それを四人に悟られまいと声を抑える。その状況を、語り手は〈哀〉としている。

⑤⑥に共通するのは、既に「哀れ」な状況に対して語り手が〈哀〉と評していることである。⑤⑥は幼い子供たちの処刑を描いた場面であり、仮に語り手の誘導が無かったとしても凄惨且つ悲惨な状況である。だが、語り手は⑤⑥それぞれの評語において、〈哀〉を用いている。そのため、『保元物語』の語り手は、幼い子供たちの処刑を「哀れ」に語ろうとする意識の他に、「評語」の言葉として〈哀〉を用いる傾向があるのではないか、ということがうかがえる。

⑦忠実の心中

鳥羽殿ニハ、故院ノ旧臣達被レ申ケルハ、「ヨニヲビタ、シク聞ヘシ内裏モ別ノ御事渡セ給ズ。又、京中モ亡ズ。誠ニ神明ノ御助ト覚ヘタリ。末代モ猶憑シ。新院被レ流サセ給ヌ。其外ニモ十四人ヲ国々ヘ分チ遣ス。即礼義ノ郷ヲ出テ、各無智ノ俗ニ移リタリ。妻ハ夫ニ別レ、子ハ父ニ別レ、親昵モ不レ随、主従ニモ各別也。別行悲、残留ル歎、何モ由ヲロカナラジ。中ニモ宇治禅閤ノ思コソ哀ナレ。憑奉ラセ給ツル左府ニハヲクレ奉給ヌ。御心ヲ憑ミ給ツル左府ノ君達ハ配所ヘ趣給ヌ。命ノ長キモ由無事也」トゾ申合レケル。

（下巻「左府ノ君達幷謀反人各遠流ノ事」一二七頁）

⑦は、保元の乱が終わった後の世評を語る場面において、鳥羽院の旧臣たちが口にしていた〈哀〉である。この〈哀〉は頼長、忠通の父親である忠実に向けられた感慨である。溺愛していた息子である頼長は既に故人となり、頼長の子供たち（忠実にとっては孫にあたる）も流罪となった。忠実は都に一人残されることになり、それに対して鳥羽院の旧臣たちは〈哀〉と述べている。

この世評を語る「故院ノ旧臣」は、それが具体的に誰なのか、ということまでは明確になっていない。したがって、⑦は登場人物の姿を借りて語り手が〈哀〉と述べている箇所だと考えられる。

⑧崇徳院の火葬

其時、御蔵ト思シキ物立タリケレバ、其ニ申ケルハ、「我ハ都ニサブラヒテ、常ニ召被レ仕シ伶人是成ト申者ガ、今ハ法師ニ成テ、蓮如ト申也。爰ニ候物ヲ進セバヤ」ト申セバ、取テ進セタリ。歌ヲゾ読テ進セタル。

アサクラヤ木ノマロ殿ニ入ナガラ君ニ知レデ帰ルカナシサ

御返事ヲ給テ、月ノアカキニ拝見スレバ、

アサクラヲ只イタヅラニ帰ニモツリスル海士ノネコソ泣ルレ

蓮如、是ヲ顔ニ当テテ泣々京へ上ニケリ。八年ト申シ長寛元年八月廿六日、御歳四十五ト申シニ、讃岐国府ニテ御隠レアリヌ。当国之内、白峰ト云所ニテ、薪ニ積ミ籠奉ル。煙ハ都ノ方ヘゾ靡キヌラムトゾ哀レ也。

（下巻「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事付崩御ノ事」一三四頁）

⑧は崇徳院に向けられた〈哀〉である。保元の乱に負けたことで讃岐へ流罪となった崇徳院は、その地で生涯を終えることになる。崩御する前、崇徳院は望郷の念が強かったことと、それを後白河院に蔑ろにされたことによって生きたまま怨霊化している。そのような経緯もあったためか、火葬された煙が都の方角に靡いたという。それに語り手は〈哀〉と述べている。この点からみて、語り手は怨霊化した崇徳院に同情・共感を示していることが明らかである。乱の発端部において、崇徳院が恨みを募らせたことを〈理〉としていたように、ここでも語り手は崇徳院の思いを〈哀〉としている。そのため、この場面の〈哀〉は語り手の視点と、〈理〉と〈哀〉の関係について、という二つの重大な問題を孕んだ箇所だといえる。崇徳院の怨霊化は、作中でも語られているように人々に対して大きな影響をもたらした出来事である。『保元物語』には崇徳院怨霊鎮魂の目的がある、とされていることからみても、⑧における〈哀〉は非常に重要

だと考えられる。

『保元物語』における〈理〉と〈哀〉で共通していることは、いずれも物語における重大な局面や行為・判断・出来事等が扱われた時に用いられている、ということである。また、語り手によって〈理〉と〈哀〉と述べられたことによって、同情や共感を向けられている人物がいる。それぞれに直接的・間接的という違いはあるが、その時の人物は、すべてその場面における「敗者（弱者）」である、ということも〈理〉と〈哀〉で共通している。このことは〈哀〉という言葉の意味を考えた際には予想がつくが、〈理〉でも同様であることがわかった。こうしたことを踏まえると、やはり〈理〉と〈哀〉には相関性があるのではないか、と思われる。〈理〉と〈哀〉が「敗者（弱者）」に向けられる傾向があり、作品にとってきわめて重要な言葉であるとすれば、『保元物語』が「敗者（弱者）」のための物語として位置づけられる根拠にもなろう。

さて、次節以降、他の軍記物語の〈理〉と〈哀〉がどのようなものになっているか、ということを確認する。その上で『保元物語』でみられた〈理〉と〈哀〉の傾向は、他の軍記物語でもみられるものなのか、ということについて考察を行っていく。

二、『平治物語』における〈理〉と〈哀〉

『保元物語』における〈理〉と〈哀〉がどのような特徴を持っているのか、を考察することが本稿の大きな目的である。ここまでの考察では、『保元物語』の〈理〉と〈哀〉はそれぞれ重要な局面で用いられており、語り手の意思が十分に反映された言葉である、ということがわかった。この点を『保元物語』の特徴であると位置付けるためには、他作品における〈理〉と〈哀〉がどのような扱いとなっているのか比較検討することが必要となる。よって、『保元物語』と同様に平安時代末期に起こった戦乱を題材とした『平治物語』『平家物語』の〈理〉と〈哀〉を『保元物語』と比較することとする。本節ではまず『平治物語』を扱う。

『平治物語』は保元の乱から三年後の平治元年に起こった平治の乱を描いた軍記物語である。平治の乱は、後白河院

派と二条天皇派の対立から始まり、後白河院の側近である信西と藤原信頼の権力争い、保元の乱後の処遇に不満を持っていた源氏と平家の武力衝突に展開していく。そして、信西は自害、信頼は死罪、また源氏の頭領である源義朝は暗殺され、子息の頼朝は伊豆に流罪となった。その結果、平清盛は権力を強め、平家は隆盛を極めることになる。義朝の妻である常葉御前（『平治物語』本文においては一箇所を除き「常葉」表記であるため、本稿でもそれに従う）が牛若（後の義経）を連れて清盛の前に出頭する話は有名であり、それは『平治物語』でも語られている。

『平治物語』において「理」という言葉そのものは全体で一六例あり、その中で〈理〉は六例である。[注8] 以下、『平治物語』における〈理〉が何について述べたものなのか、ということについて述べていく。なお、『平治物語』本文の引用は、栃木孝惟・日下力 他 校註『新日本古典文学大系43　保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店、一九九二年七月）であり、引用後に示した章段名と頁数は本書に拠る。[注9]

①同五日、左馬頭義朝が童金王丸、常葉が許に忍びて来り。馬よりくづれ落、しばしは息たえて物もいわず、ほどへておきあがり、「頭殿は、過ぬる三日の暁、尾張国野間の内海と申所にて、重代の御家人長田四郎忠宗が手にかゝりて、うたれさせ給ひ候ぬ」と申せば、常盤（ママ）をはじめ、家中にあるほどの者共、声〳〵に泣かなしみける。まことになげくも理也。枕をならべ、袖をかさねし名残なれば、身ひとつなり共、かなしかるべし。

（中巻「金王丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」二二四～二二五頁）

『平治物語』上巻においては〈理〉がみられず、平治の乱の戦いが終わり、義朝の最期を金王丸が常葉に語る場面ではじめて出現する。

①で〈理〉とされているのは、義朝の死を告げられた常葉や家中の人間が声を上げて泣き悲しむことである。「枕をならべ、袖をかさねし名残なれば、身ひとつなり共、かなしかるべし」という表現は、常葉と義朝が夫婦として過ごした時間のことを指しており、「夫」を亡くした常葉の悲しみが強調されている。そのため、この場面における〈理〉は

「哀れ」という感情も孕んでいるように考えられる。

②（金王丸の語り）去年十二月廿九日、尾張国野間の内海、長田庄司忠宗が宿所へつかせ給ひ候ぬ。此忠宗は、御当家重代奉公人なるうへ、鎌田兵衛が舅なれば、御頼あるもことはり也。

（同、二二九頁）

②は、①の場面に引き続いた箇所である。金王丸が義朝の最期を語り聞かせるところで、〈理〉が用いられている。なぜ義朝が長田忠宗を頼ったのか、ということが述べられており、それは長田が鎌田の舅だったから、という理由である。そのため、何の疑いもなく長田を義朝が頼ったのも〈理〉だ、と述べられている。このことから、②の〈理〉は「もっともである」という意味のみで用いられていることがわかる。

③（常葉が美人であるということに触れて）ある人、申けるは、「よきこそ、ことはりなれ。大宮左大臣伊通公の、中宮御所へ、見目よからん女をまいらせんとて、よしときこゆる程の女を、九重より仙人召れて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちの一にて、此常葉をまいらせられたりしかば、わろかるべきやうなし。さればにや、見れども〳〵、めづらかなるかほばせなり。唐楊貴妃・漢李夫人が、一度咲ば百の媚をなしけんも、これには過じ」と、たはぶれ申人もあり。

（下巻「常葉六波羅に参る事」二五九頁）

③は常葉の容姿について触れられている部分である。「ある人」が言ったところによれば、常葉の容姿が優れているのは「理」で、それは「大宮左大臣伊通公の、中宮御所へ、見目よからん女をまいらせんとて、よしときこゆる程の女を、九重より仙人召れて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちの一にて、此常葉をまいらせられたりしかば、

わろかるべきやうなし。さればにや、見れども〳〵、めづらかなるかほばせなり」といった理由による。よって、③における〈理〉も「もっともである」という意味で捉えてよい。

④皆人はながさるゝを嘆けども、兵衛佐は悦けり。理かな、きらるべき身がながさるれば。され共、都の余波、せんかたなし。所々に馬をひかへ、頻に跡をぞかへり見ける。

（下巻「頼朝遠流の事付盛康夢合せの事」二六八～二六九頁）

④は流刑先に向かう頼朝の心情を表した場面である。頼朝以外の人間は現在の状況に嘆いていたが、頼朝は喜んでいた。語り手はそれに「理」があるとしている。本来、頼朝は処刑されるはずが助けられた立場であったからである。頼朝にとって流罪となったことは嘆くものではなく、喜びであった。そのため、この場面における〈理〉も、「もっともである」という意味である。

⑤兵衛佐は不破の関を越て、美濃国青墓の宿を過る時、父義朝の此宿にて、兄中宮大夫進朝長を手にかけて、うしなはれけん心のうち、思しられてかなしかりけり。株川を渡りし時は、源光が舟にて下られける川なれば、しらぬ舟人の漕行も、心なき水のながれも、なつかしくぞ思はれける。尾張国熱田宮に着ても、「故左馬頭、討れ給ひし野間の内海はいづくぞ」と、所の者にとひ給へば、「鳴海潟をへだてて、霞わたりたる山こそ、そなたにて候へ」と申ければ、心の中に、「南無八幡大菩薩、頼朝を今一度、世にあらせましませ。忠宗・景宗を手にかけて、亡父の草陰に見せまいらせ候はん」と、なく〳〵祈誓したるこそことはりなれ。

（同、二七二頁）

⑤は流刑先に赴く道中での場面である。親族ゆかりの場所に立ち寄った頼朝は、熱田宮において義朝が討たれた場所

はどこにあるのか、と尋ねる。鳴海潟を隔てた山がその場所だと聞くと、頼朝は父の敵を取りたいと心中で祈誓する。その様子に語り手は「理」があると述べている。ここで語り手が「もっともである」と認めているのは、頼朝の「祈誓」という行為そのものと、敵を討つことを誓った、という内容の二つだと考えられる。

⑥大弐清盛は、尋常なる一局をしつらひて、常葉をすませてぞかよひける。むかしより今にいたるまで、賢帝も猛き武士も、情のみちには迷て、政をしらず、いさめるみちを忘れけるとかや。「しかじ、傾城の色にはあはざらんには」と、香山居士が書置けるは理かな。

（下巻「牛若奥州下りの事」二七五頁）

⑥は清盛の行為に対して批判を表した箇所である。清盛は常葉を側に置くことにしたが、語り手からみれば、それは古今東西問わず、「賢帝も猛き武士も、情のみちには迷て、政をしらず、いさめるみちを忘れける」ことだった。つまり、清盛が色に迷い、政治の道を見失うのが世の常だ、ということである。それを踏まえ、香山居士（白居易）が書き置いた「しかじ、傾城の色にはあはざらんには」といったことも〈理〉と述べている。これは清盛の奢った心を念頭に置いた措辞であり、〈理〉は「もっともだ」という意味で用いられている。

①～⑥の〈理〉に共通しているのは、語り手が〈理〉と認めているものが登場人物の「その時々の行動」を指している、という点である。例えば、①において〈理〉とされているのは「常盤をはじめ、家中にあるほどの者共、声々に泣かなしみける」という、義朝が遂に討たれてしまったことで家中の人々が泣き悲しむ、という行為である。また、②は義朝と正清がなぜ長田忠宗を頼ったのか、ということに対して、忠宗が正清の舅だったので彼らが頼るのも〈理〉としている。他、③～⑥も同様に、『平治物語』の〈理〉はその時々の行動の妥当性を認めるものとなっている。

『保元物語』でも〈理〉と語られた内容が指し示すものは、その時点での「その時々の行動」であることは間違いない。しかし、『保元物語』では〈理〉と認めた内容がその後の展開に大きく関与していく点が異なる。つまり、『保元物

語』の場合は語り手が物語全体を俯瞰した上で、「もっともである」と認めるべきところに〈理〉を用いているのだと考えられる。『平治物語』に欠けているのは物語全体を俯瞰する視座である。そしてこの点こそが、『保元物語』と『平治物語』の〈理〉の違いである。この特徴を踏まえ、『平治物語』における「その時々の行動の妥当性を認める〈理〉」を、本稿では便宜上「『平治物語』系の〈理〉」と表す。

次に「哀」について見ていこう。『平治物語』の「哀」は全体で九例あり、その中で〈哀〉は六例である。(注10)

①（常葉の子供が金王丸に泣き縋って）金王丸も目もあてられず、をしはなたんもかはゆく覚えて、「頭殿は、東山なる所に忍びて渡らせ給へば、夜に入てこそ御迎に参候はんずるぞ。此小袖、はなたせ給へ」とすかせば、「さては」とて手をはなち、泪をばこぼしながら、うれしげなる顔に見えけるこそ、むざんなれ。金王丸、暇を乞て出しかば、「頭殿の行衛をとへば、をのれが名残さへおしきぞや。今より後は、いつかは又も見ん」と、なき悲しむこそあはれなれ。

（中巻「常葉註進幷信西子息各遠流に処せらるる事」二二二頁）

①は、金王丸と常葉、その子供達の場面である。元々、金王丸は義朝に同行していた。だが、妻子を心配した義朝に戻るよう言われ、常葉の元に参上する。その金王丸に常葉の子供たちは敵を討ちたいから義朝のところへ連れて行けと頼む。見かねた金王丸は夜になったら義朝を迎えに行くつもりだ、と言って子供たちを騙す。子供たちが信じ込んで喜んでいる様子を、語り手は「むざんなれ」と評している。其の上で、金王丸に常葉は、夫である義朝がいない今となっては金王丸でさえもいなくなるのが名残惜しい、と話す。それを語り手は〈哀〉と述べている。

②去保元の合戦には、為義入道を、郎等波多野次郎にきらせ、纔に一両年のうちぞかし。今度の合戦にうちまけては、譜代の郎等忠宗が手にかゝりて身をほろぼす。「逆罪の因果、今生にむくふにて心えぬ、来世無間の苦は疑なし」

と、群集（くんじゅ）する貴賤上下、半は謗、半は哀みたり。

（中巻「長田、義朝を討ち六波羅に馳せ参る事付大路渡して獄門にかけらるる事」二三三頁）

②は保元の乱と平治の乱について人々が語っている場面である。保元の乱において、実際に手を下したのは鎌田だったが、義朝は父である為義を斬った。それからあまり年数も経っていないうちに平治の乱が起こり、義朝は長田の手に掛かって誅死する。この出来事に対して、「群集する貴賤上下」の人々は、親を殺した因果によるものだ、と口にする。その中で、半数の人々は義朝を非難し、半数は哀れんだという。「半は謗、半は哀みたり」という言葉は、特定の誰かではない人々が口にしたことを、「語り」によって語り手が述べている。そのため、保元の乱において義朝が為義を助けなかったことは非難すべきだが、平治の乱において長田に騙されて殺されたのは「哀れ」だ、という語り手の複雑な心境を、この〈哀〉は表していると考えられる。

③兵衛佐頼朝は、去年十二月廿八日の夜、雪深き山を越かねて、父にはおひ遅れぬ、此彼にさまよひけるほどに、近江国大吉寺と云小山寺の僧、不便がりてかくし置けるが、御堂の修造もちかづく、「人集ては、あしかりなん」と申せば、かの寺を出て、浅井の北郡に迷ひゆく処に、老翁老女の夫婦有けるが、哀（あわれみ）をかけてかくしをく。

（中巻「頼朝生け捕らるる事」二三八頁）

③は頼朝に関係する場面である。頼朝は、敗走中に義朝たちとはぐれてしまう。すると、浅井の北郡で出会った老夫婦が、頼朝を哀れんで匿う。この場面における〈哀〉は語り手ではなく老夫婦が抱いた感情（頼朝への同情）である。

④（自分のみ流罪先に残された）別当入道は、猶、いきどをりふかくて、召返さるまじきよし聞えければ、心ぼそくや思はれけん、御所の女房たちのかたへ消息をまいらせけるおくに、

今の世にもしづむと聞けばなみだ川ながれしよりもぬるゝ袖かな

女房達、此歌を物がたり申されければ、君も哀と思召て、急召かへされてけり。

（下巻「経宗・惟方遠流に処せらるる事、同じく召し返さるる事」二六四頁）

④は流罪となった惟方の場面である。惟方は長門国へ流されたままだったが、他の流人は赦されて都に戻っていた。惟方がいつまで経っても赦されないのは、後白河院の怒りが大きいからだろう、という噂が立つ。そこで惟方は院御所の女房に宛てた手紙に「今の世にも」の歌を書きつける。それが女房たちの口にのぼるようになり、それを聞いた後白河院が哀れんで惟方を遂に赦した。この場面の〈哀〉も、後白河院が抱いた感情を表しており、語り手自身の感慨ではない。

⑤胡馬、北風に嘶、越鳥、南枝に巣をかくる。畜類の無レ心だにも、故郷は忍ぶ心あり。東平王といひし人、旅にてはかなく成しかば、其塚上なる草も木も、故郷のかたへぞなびきける。遊子は神となりて、巷を過る人をまもり、杜宇は鳥となりて、旅なる者をかへれとなく。これらは長途に命をおとし、他郷に尸をとめしが、望郷の魂うかれて、外土の恨をあらはししたぐひ也。兵衛佐が心も、さこそとおぼえて哀也。

（下巻「頼朝遠流の事付盛康夢合せの事」二六九頁）

⑤は頼朝が流されている途上の場面である。語り手は中国の故事を語り、頼朝の境遇と重ねる。そして、今の頼朝も故人と同じ気持ちだろう、と推察して〈哀〉と述べている。

⑥常葉は、大弐に思はれて、女子一人まうけてけり。大弐にすさめられて後、一条大蔵卿長成に相具して、子共あまた有けるとかや。沙那王をば、師の阿闍梨も、坊主の禅林も、「はや出家し給へ」といへば、「伊豆にある兵衛佐に

申合て、剃れといはば剃らん、剃るなといわば剃らじ。其上、兄二人が法師に成たるをだにも、いふかひなしと思ふに、身においては剃るまじきを、しいて剃れと云ものあらば、ねらひて突きころさん」といひければ、「げにも人突よげなる児の眼ぎはなり。怖々」とぞ申あへる。大師の蓮忍も、小師の禅林も、うへには恨むやうに申せ共、その心中を存たりけるほどに、内々、哀にいとをしくぞ思ひける。

（下巻「牛若奥州下りの事」二七七頁）

⑥は、常葉と沙那王（後の義経）の後日譚である。常葉は清盛の寵愛を受けるが、後に一条長成に下げ渡されて子女を儲ける。一方、沙那王は寺に預けられていた。阿闍梨と禅林は早く出家するように言うが、沙那王は血気盛んなことを言って暗に拒否する。それを受けて、阿闍梨たちは「げにも人突よげなる児の眼ぎはなり。怖々」と憎まれ口を叩くが、実際には沙那王のことを大事に思っていた。この時に〈哀〉が用いられている。そのため、この〈哀〉も語り手の感情ではなく阿闍梨たちのものである。

以上、『平治物語』における〈哀〉の特徴は、語り手が登場人物の心情を描写している際にその言葉を用いる場合がある、という点である。言い換えれば、『平治物語』の語り手自身が〈哀〉という評価を下す場面ばかりではない、ということである。これは①⑤を除いた四例に共通してみられる特徴である。なお、②は不特定多数の人々が口にした〈哀〉であるが、語り手の考えを表した部分であると考えられる。だが、表面上は登場人物の考えとして扱われているため、②は語り手が語り手として発した言葉ではないように思われる。

①は「なき悲しむこそあはれなれ」というように、常葉と金王丸に対して「あはれなれ」と語り手自身の評価で結ばれている。また、⑤も頼朝（兵衛佐）が流罪になる道中の心情を故事になぞらえた上で「さこそとおぼえて哀也」と述べられている。つまり、この〈哀〉も語り手の感慨であるといってよいだろう。

①⑤を除いた〈哀〉は、語り手が登場人物（対象）の心情を描写したものである。したがって、語り手自身の感情から発せられているものとはいえない。このことから、『平治物語』の語り手は登場人物に感情移入し、自らが〈哀〉と

いう判断を下すことが少ない、ということが浮かび上がる。つまり、『平治物語』の〈哀〉は、登場人物に対して共感・同情を示そうとする意識が基本的に希薄である。このことから、『平治物語』の語り手は登場人物や物語と一定の距離を置いているように考えられる。よって、『平治物語』は〈哀〉を用いて登場人物に接近しようとしてはいないことがわかるのである。

三、『平家物語』における〈理〉

『平家物語』は平家の滅亡を主軸としつつも、それ以外の多岐に渡る様々な出来事を群像劇として描いた作品である。それにより、『保元物語』や『平治物語』と比べて大部になっており、「理」と「哀れ」、及び〈理〉と〈哀〉の数も多い。そのため、すべての用例を検討することは難しい。よって『平家物語』では、〈理〉と〈哀〉の特徴別にそれぞれを考察していくこととする。以下、『平家物語』本文の引用は、市古貞次 校注訳『新編日本古典文学全集　平家物語①②』（小学館、一九九四年六月）とし、本文の引用後に示した数字はその頁数である。[注11]

まずは〈理〉について考察を行う。『平家物語』の〈理〉は、巻毎に示すと以下の二四例となる。

巻第一……5
巻第二……1
巻第三……4
巻第四……1
巻第五……0
巻第六……2
巻第七……2
巻第八……1

巻第九……2
巻第一〇……1
巻第一一……2
巻第一二……2
灌頂巻……1

その分布をみると、物語の前半部に大半が集中していることがわかる。この点では『保元物語』と同様である。

一方で、『保元物語』『平治物語』の大半で用いられている、一連の場面を結ぶ箇所における評語としての〈理〉は、『平家物語』では五例のみであることがわかった。特徴をみていくと、その五例の中でも二種類に分類することができる。一つ目が『平治物語』と同じ用いられ方をしている〈理〉、二つ目が〈理〉と〈哀〉を併用して用いている〈理〉である。種類毎に例を一つずつ挙げて、詳しく検討していく。

一つ目は『平治物語』系の〈理〉である。これは、語り手が〈理〉と認めたものが至極当然のこと、つまり「もっともである」と肯定し、その妥当性を認める意味のみで用いられている〈理〉である。『平家物語』においても『保元物語』の〈理〉のように、全体を俯瞰した立場から〈理〉と述べているような箇所は見つからなかった。そのため、評語としての〈理〉の一種類目は『平治物語』と同じ用法で用いられたものだと考えられる。

（一）『平治物語』系の〈理〉

小松のおとどは、例の善悪にさわがぬ人にておはしければ、其後遥かに程へて、嫡子権亮少将以下、公達の車共、みなやりつづけさせ、色々の御衣四十領、銀剣七つ、広蓋におかせ、御馬十二疋ひかせて参り給ふ。是は寛弘に上東門院御産の時、御堂殿、御馬を参らせられし、其例とぞ聞えし。このおとどは、中宮の御せうとにておはしけるうへ、父子の御契なれば、御馬参らせ給ふも理なり。

（巻第三「御産」一九六頁）

右の引用部は、高倉院の中宮・徳子の出産を控えて、平重盛が馬を贈る場面である。ここで〈理〉とされているのは「重盛が馬を贈る行為」であり、その理由は「中宮の御せうとにておはしけるうへ、父子の御契なれば」というものである。徳子の兄であり父代わりである重盛が馬を贈ることはもっともである、と語り手は評価している。ここでの〈理〉は至極当然のこと、というような意味合いで用いられていると考えられ、語り手の感情が含まれているとは言い難い。①と同様のパターンとしては、語り手の評語としての〈理〉五例の内、三例が当てはまり[注12]、これらは作品の前半部に分布している。

『平家物語』における二つ目の〈理〉は、〈理〉と〈哀〉を併用して用いている〈理〉である。具体的にいえば「理と覚えて哀れなる」というもので、〈哀〉の根拠が〈理〉と明示されているものである。「ナリ」が下接しているのは「哀れ」だが、それには〈理〉が必要になる、ということである。そのため、「理と覚えて哀れなる」は〈理〉の意識が前提となっており、〈哀〉のみでは成り立たない。つまり、この一文は評語の〈哀〉である一方で、評語の〈理〉でもある。このような〈理〉と〈哀〉を併用した〈理〉は、評語としての〈理〉五例中二例が該当する[注13]。

（二）〈理〉と〈哀〉を併用した〈理〉

（資盛の問いに対して、舎人武里が）「申せと候ひしは、『西国にて左の中将殿うせさせ給ひ候ぬ。一谷で備中守殿うたれさせ給ひ候ひぬ。われさへかくなり候ひぬれば、いかにたよりなうおぼしめされ候はんずらんと、それのみこそ心苦しう思ひ参らせ候へ』」。唐皮、小烏の事までもこまぐ〳〵と申したりければ、「今はわれとてもながらふべしとも覚えず」とて、袖をかほにおしあててさめ〴〵と泣き給ふぞ、まことに理と覚えて哀れなる。

（巻第一〇「三日平氏」三一八頁）

右の引用部は、入水した維盛が弟である資盛に言い残したことはなかったかと資盛自身が舎人武里に尋ねる場面である。既に先立った弟たち、清経、師盛に加え、兄維盛までも失うことになる資盛を思いやった言葉が述べられている。それを受けて資盛は「今はわれとてもながらふべしとも覚えず」と言ってさめざめと泣く。資盛が述べたこと、行動に対して語り手は「理」があるとし、更に「哀れなる」と結んでいる。ここでは〈哀〉が〈理〉と共に用いられていることによって、語り手の感慨が強く浮き出たものとなっているが、実は〈理〉と〈哀〉が同時に用いられているのは『平家物語』以外にはみられない。この点は『平家物語』ならではの特徴として挙げられよう。

さて、評語としての〈理〉ではないものの、『平家物語』における〈理〉で目立つ用例がある。それは「理をまげる（非をもって理とす）」という表現である。こうした使い方は『平家物語』中に六例みられるが[注14]、これは〈理〉全体の四分の一に相当するため、それなりの量を占めているといってよい。

（三）〈理〉をまげる

既に船出すべしとて、ひしめきあへば、僧都乗ッてはおりつ、おりては乗ッつ、あらまし事をぞし給ひける。少将の形見には、よるの衾、康頼入道が形見には、一部の法花経をぞとどめける。ともづなといておし出せば、僧都綱に取りつき、腰になり脇になり、たけの立つまではひかれて出づ。たけも及ばずなりければ、舟に取りつき、「さていかにおの〳〵、俊寛をば遂に捨てはて給ふか。是程とこそ思はざりつれ。日比の情も今は何ならず。ただ理をまげて乗せ給へ。せめて九国の地まで」とくどかれけれども、都の御使、「いかにもかなひ候まじ」とて、取りつき給へる手を引きのけて、舟をばつひに漕ぎ出す。

（巻第三「足摺」一九三〜一九四頁）

右の引用部は、鹿ケ谷事件の罪で流罪となった俊寛に関わる場面である。俊寛と共に鬼界島に流された平康頼と藤原成経は、建礼門院の出産による赦免で都に戻されることになった。だが、俊寛だけは赦されず、島に残ることになる。

その事実を受け入れられない俊寛は、赦免使に「ただ理をまげて乗せ給へ」と頼む。ここでは俊寛を船に乗せることはできないこと（罪が赦されないこと）が「理」とされている。俊寛が「理をまげて」と口にしていることから、俊寛もそれが「理」だと理解していることがわかる。だが、俊寛はそれを知った上で、あえて「理をまげて」ほしい、と頼んでいる。

「足摺」の例のように、（三）の〈理〉はすべて発言者が語り手ではなく登場人物の誰かである。そして、発言者が発する〈理〉はその内容を理解した上でそれを曲げるように要求していることが共通する。したがって、（三）の〈理〉の場合、「理」をどうするか決めることができるのは発言者（俊寛）ではなく、相手（赦免使）である。発言者は相手に「理」があることを理解した上で、それを曲げるよう要求している立場といえる。

以上、『平家物語』における〈理〉をまとめると、発言者が語り手で「理なり」と結ばれている箇所であっても、場合によっては語り手の感情が含まれた評語であるとは言い難いものがあることがわかる。それが、『平治物語』系の〈理〉である。そのため、これらの例は一般概念として意味が揺るぎようのない「～の理」の性質に近くなっている。

対して、「理と覚えて哀れなる」というように、〈理〉と〈哀〉が併用されて評語となっている箇所は、〈哀〉を併用することによって語り手の感慨が積極的に述べられていると解釈できる。よって、これらは『保元物語』の〈理〉のような用い方になっていると考えられる。

最後に、『平家物語』において新しくみられた「理をまげる」という表現であるが、これは「理」をどうするか、という決定権が発言者には無く、会話の相手に委ねられたものになっていることが大きな特徴である。また、「理」を「まげる」ことができる（要求することが許される）、という点で、規範意識や道徳意識といった、「決して変えられないもの」という意味の「理」という意味は薄くなる。

以上を整理すると、一口に〈理〉といっても、その内容にはいくつかの種類があることがわかる。それが法則や規範意識という、概念として固定されたものに寄るか、その時々の状況や発言者の感情にある程度委ねられるのかは『平家物語』の場合は一様ではない。『平家物語』における〈理〉は、場面状況と登場人物の状態によって二つの性質に分け

られるように考えられる。

四、『平家物語』における〈哀〉

次に『平家物語』における〈哀〉について述べる。『平家物語』の〈哀〉を巻毎に示すと以下の一一二例である。

巻第一……3
巻第二……10
巻第三……7
巻第四……8
巻第五……5
巻第六……4
巻第七……14
巻第八……2
巻第九……4
巻第一〇……25
巻第一一……13
巻第一二……9
灌頂巻……8

これをみてわかるように、『平家物語』における〈哀〉の数は非常に多いことがわかる。巻毎に偏りはあるものの、平家が壇ノ浦で滅びる場面が収められた巻第一〇は特に多い。『平家物語』は長大な作品であるため、『保元物語』や

『平治物語』との数量的な比較は単純に行うことができないものの、それでも『平家物語』の〈哀〉は頻出語句であるといえるだろう。この点について市古貞次は以下のように指摘している。

> 「ほろびの文学」である『平家物語』に著しいのは悲哀感であった。（中略）このような悲哀感は、平家の悲運を描いたという内容から推して、当然流れているべきものであるが、同じく敗戦・没落を題材にした作品でも、『保元物語』『平治物語』とは、大きな違いがあることを感ぜざるを得ない。試みに「あはれ」という語を取り上げて見ると、『保元物語』『平治物語』よりもはるかに頻度数が高いことに気づく（『太平記』ではいっそうその数を減じている）。こういう語彙の調査はさまざまな面で配慮すべき点があるが、一往の目安とはなろう。『平家物語』では、そういう「あはれ」の用い方が効果的であることは注目してよい。激しい世の動きや壮絶を極めた戦いの間々に「あはれ」が投入されているのである。『平家物語』は平家の挽歌だが、同時に人々のあわれをもよおす死の文学であった。(注15)

市古が指摘するように、用例数のみを判断材料にして、〈哀〉が『平家物語』にとって重要であると判断することには慎重になるべきだろうが、その用いられ方をみることによって〈哀〉が『平家物語』にとってどのような言葉なのかを考察することは可能であるように考えられる。

『平家物語』において、語り手の感慨が特に強く述べられていると考えられる〈哀〉がある。それは「おしはかられて哀れなる」、「思いやられて哀れなる」という、発言者が「哀れ」む相手の心情を推量している言い回しである。これは『平家物語』中に二〇例あり、一六例が後半部に集中している。(注16) 以下、例を挙げて検討してみたい。

相手の心情を推量する〈哀〉

①落ち行く平家は誰々ぞ。（中略）都合其勢七千余騎、是は東国北国度々のいくさに、此二三ケ年が間、討ちもらさ

れて纔かに残るところなり。山崎関戸院に、玉の御輿をかきすゑて、男山ふし拝み、平大納言時忠卿、「南無帰命頂礼、八幡大菩薩、君をはじめ参らせて、我等都へ帰し入れさせ給へ」と祈られけるこそかなしけれ。おの〳〵うしろをかへり見給へば、かすめる空の心地して、煙のみ心ぼそく立ちのぼる。平中納言教盛卿、

　はかなしなぬしは雲井にわかるれば跡はけぶりとたちのぼるかな

修理大夫経盛、

　ふるさとをやけ野の原にかへりみてすゑもけぶりのなみぢをぞゆく

まこと故郷をば一片の煙塵に隔てつつ、前途万里の雲路におもむかれけん、人々の心のうち、おしはかられて哀れなり。

（巻第七「一門都落」八六～八七頁）

①は、平家の人々が都落ちする場面を描いたものである。引用部において中略した箇所は、都落ちした平家の人々の名が列挙されている。この時点での平家の頭領である宗盛を筆頭に、多くの人物が同行したことが語られている。

都落ちに際して、忠盛の三男と四男、つまり清盛の弟にあたる教盛と経盛が歌を詠む[注17]。平家一門の中でも年長者である二人が、都を離れる寂しさを詠ったことを受けて、語り手は故郷である都を離れることになった人々の心中を推察し、「おしはかられて哀れなり」と述べている。

②既にうたれんとする事度々に及ぶといへども、かけやぶりかけやぶりとほりけり。木曾涙をながいて、「かかるべしとだに知りたりせば、今井を勢田へはやらざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契りしに、所々でうたれん事こそかなしけれ。今井がゆくゑを聞かばや」とて、河原のぼりにかくるほどに、六条河原と三条河原のあひだに、敵おそってかかればとッてかへし、わづかなる小勢にて、雲霞の如くなる敵の大勢を、五六度までぞおッかへす。鴨河ざッとうちわたし、粟田口、松坂にもかかりけり。去年信濃を出でしには五万

余騎ときこえしに、今日四の宮河原を過ぐるには、主従七騎になりにけり。まして中有の空、思ひやられて哀れなり。

（巻第九「河原合戦」一七四～一七五頁）

②は木曾義仲に対する〈哀〉である。この場面に至る前に、義仲は乳兄弟である今井兼平を勢田に遣っている。しかし、義経に追われた義仲は心細くなり、なぜ今井をそちらに行かせてしまったのかと後悔する。その中でも、義仲は敵がいれば追い返し、何とか持ちこたえる。それでも、前年に信濃を出立した時には約五万騎いた軍勢が、現在は主従七騎のみである。兼平が側におらず、一人で旅路を行かねばならない義仲の孤独を思いやって、語り手は「思ひやられて哀れなり」と述べている。

①②のように、相手の心情を推量する〈哀〉は、すべて語り手が登場人物の心情を推察して〈哀〉と述べている。そのため、この点では『平治物語』の〈哀〉と似た用いられ方をしているように思われる。だが、『平家物語』では〈哀〉に「おしはかられて（思ひやられて）」という言葉が付随しているため、語り手が「推量する」という、ある程度の主体性が見受けられる。『平治物語』の〈哀〉は語り手が登場人物の心情を代弁する用法で用いられているので、語り手の意思として「哀れ」という感情があるかどうかは不明瞭だった。対して、『平家物語』は「おしはかられて（思ひやられて）」という思考の後に〈哀〉と結ばれている。そのため、「哀」という感慨は語り手のものだというように考えられる。また、この「おしはかられて（思ひやられて）哀れなり」という言い回しは『保元物語』や『平治物語』にはみられない。以上の点が、『平家物語』における相手の心情を推量する〈哀〉の特徴である。[注18]

なお、『平家物語』における〈哀〉一一二例を、品詞別に分類すると以下のようになる。

「哀れなり」「哀れに」「哀れげ」（形容動詞）……八〇例
「哀れ」（名詞）……二二例

「哀れむ（み）」（動詞）……一〇例

これをみると、形容動詞として用いられている〈哀〉が全体の約七割を占めていることがわかる。『保元物語』の〈哀〉は形容動詞と感動詞のみで構成されていた。『平治物語』では名詞の〈哀〉が数例みられたものの、大部分が形容動詞と感動詞となっており、用例としてのパターンも『平家物語』と比較すると少ない。この点からみても、『平家物語』の〈哀〉は他の軍記物語と比べても用例が豊富だといえる。また、市古が指摘するような「悲哀感」が『平家物語』を包み込んでいる、といえる一要因になっていることを示しているのではないか、と考えられる。

文法上でも〈哀〉の種類が多岐に渡る『平家物語』においては、その状況や場面によってどういった種類の〈哀〉を用いるのかがしっかり規定されているように思われる。[注19]その品詞による法則性をみることによって、『平家物語』における〈哀〉がどのような用いられ方をされているのか、ということがよりはっきりとみえてくるように思われる。そのため、この点については今後の課題としたい。

おわりに

第二節から第四節にかけて、『保元物語』『平治物語』『平家物語』における〈理〉と〈哀〉について考察してきた。最後に『保元物語』と他二作品の比較を通し、『保元物語』における〈理〉と〈哀〉の特徴を明確にしておこう。

第一節において述べたように、『保元物語』が〈理〉としたものは物語の展開に大きく関わっていた。これに対して、『平治物語』の〈理〉は、〈理〉が作品にとって重要な思想、行動、契機になっているとはいえず、物語の展開にそれほど大きく関わっていないことがわかった。つまり、『平治物語』の〈理〉は物語の次の展開に繋がってこないのである。この点が、『保元物語』と『平治物語』の〈理〉の差異だと考えられる。

また『平治物語』の〈哀〉において特徴として挙げたのは、『平治物語』の語り手と登場人物の間には距離がある、ということであった。反対に『保元物語』の〈哀〉は、語り手が物語に入り込んだ状態で発せられる言葉と解釈できる

ため、登場人物や物語に対する語り手の距離感は近いように考えられる。語り手自身の思いや考えが〈哀〉という言葉に反映されているかどうか、ということは、非常に重要な問題だろう。その点、『保元物語』の〈哀〉は、「哀れ」という感情を直接的に述べたものではない用例[注20]を除き、すべて語り手自身の判断によって〈哀〉と語られていた。そのため『保元物語』の〈哀〉は、語り手の主体性が高い言葉として用いられていることがわかる。

ついで『平家物語』を取り上げたが、『平家物語』の〈理〉には様々な種類が確認できた。まず、評語としての〈理〉である。これは「『平治物語』系の〈理〉」「〈理〉と〈哀〉が併用された〈理〉」の二種類に分類することができた。また、評語としての用例ではないものの、『平家物語』特有の表現として「〈理〉をまげる」という表現があった。『平家物語』では、このように、〈理〉という一つの言葉においても様々な用例がみられた。こうした表現の多彩さが、『平家物語』の大きな特徴といえるだろう。

〈理〉に関していうと、『保元物語』は「もっともである」という意味のみを示す〈理〉、同情や共感を示す意味が強い〈理〉の二種類しかない。それにより、『平家物語』と比較すれば『保元物語』は表現に乏しい、という見方もできる。一方で、『保元物語』において重要なのは〈理〉が物語の筋に関わる局面を描く場合に用いられる言葉、ということである。また、『保元物語』において重大な場面を締めくくる際に〈理〉が用いられている、という点は、必然的に語り手が「評語」として〈理〉を用いる機会が多いことにも繋がる。よって、『保元物語』にとって〈理〉は「語り」を行う上で重要な言葉、といえるだろう。

『平家物語』における〈哀〉は、用例数が他の作品と比べても圧倒的に多く、それに付随して用例の種類も多いことが一番の特徴といえる。その用例の中でも、語り手の主体性が高いと思われるのが「おしはかられて（思ひやられて）哀れなる」という、語り手が相手の心情を推量している〈哀〉である。これは『保元物語』や『平治物語』にはみられない表現であり、『平家物語』特有のものだといえる。

『保元物語』の〈哀〉は、〈理〉と同じように表現の種類が少ない。一方で、形容動詞の〈哀〉はすべて語り手の評語として用いられている、という点に一番の特徴がある。そのことによって、『保元物語』における〈哀〉は語り手の主

体性が高い言葉となる。『保元物語』における〈哀〉は、語り手が登場人物に接近した上で、「哀れ」という感情を表明するための言葉だと解釈できる。

以上をまとめると、『保元物語』における〈理〉と〈哀〉は他の作品と比較しても、語り手の主体性が高いことがわかった。このことは、〈理〉と〈哀〉という言葉が語り手の意思や考えを十分に反映しているもの、ということに繋がってくる。筆者の目論見は『保元物語』における〈理〉と〈哀〉を考察することによって、「語り」の目指した意図や目的をが明らかにするところにあるが、そうした「語り」の意図・目的についてはいずれまた稿を改めて論じることにしたい。

注

1　本稿第一節において触れている〈理〉八例に加え、「～の理」四例。四例は上巻「後白河院御即位ノ事」「法皇崩御ノ事」（二例）「新院御謀叛思シ召シ立ツ事」にみられる。

2　上地俊彦「『源氏物語』の「ことわり」――その「もののあはれ」と近接する文芸的内実についての考察――」（『岡大国文論考』三〇号（工藤進思郎先生退官記念号）、岡山大学文学部日本文学研究室、二〇〇二年三月）（八頁・上段）

3　注2に同じ。（八頁・下段）

4　注2に同じ。（八頁・下段）

5　注2に同じ。（九頁・下段）

6　本稿第一節において触れている〈哀〉八例に加え、感動詞の「哀れ」六例。六例は中巻「白河殿攻メ落ス事」「『左府ノ御最後付大相国歎キノ事」下巻「為義最後ノ事」「義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事」「左府ノ君達幷謀反人各遠流ノ事」「為朝鬼島ニ渡ル事幷最後ノ事」にみられる。

7　注1に同じ。

8　本稿第二節において触れている〈理〉四例を除いた一〇例の内訳は、上巻に二例、中巻に七例、下巻に一例となっている。

扱う諸本は、上巻が陽明文庫蔵一本、中巻・下巻が学習院大学図書館蔵本であり、どちらも一類本（古態）である。

本稿第二節において触れている〈哀〉四例を除いた三例の内訳は、中巻に一例、下巻に二例となっている。

扱う諸本は覚一本である。テキストは巻第一～巻第六が①、巻第七～巻第一二、灌頂巻が②となっている。

巻第三「御産」（本稿引用部）、巻第四「法皇被流」、巻第六「新院崩御」。

巻第一〇「三日平氏」（本稿引用部）、巻第一一「逆櫓」。

巻第一「願立」、巻第三「足摺」（本稿引用部）、巻第四「若宮出家」、巻第六「嗄声」、巻第七「維盛都落」、巻第九「越中前司最期」。

市古貞次 校注訳『新編日本古典文学全集45　平家物語①』（小学館、一九九四年六月）解説「あわれの文学」。（四九六頁）

巻第二「座主流」「小教訓」「大納言流罪」（二例）、巻第七「一門都落」（本稿引用部）、巻第九「河原合戦」（本稿引用部）、巻第一〇「内裏女房」「請文」（二例）「海道下」（二例）、「千手前」「藤戸」、巻第一一「副将被斬」「重衡被斬」、巻第一二「平大納言被流」「六代」（二例）、灌頂巻「女院出家」「大原御幸」。

引用文中においては教盛、経盛の順で登場するので、本稿においてもこの順番で述べたが、出生の順番でいえば経盛が上（忠盛の三男）である。

なお、感動詞の「哀」は『平家物語』中に二八例みられる。

たとえば、動詞の「哀れむ（み）」はその対象者よりも発言者の方が地位や身分が高い場合にのみ用いられている。

『保元物語』〈哀〉④鎌田と波多野の問答。

（付記）本稿は二〇一九年度修士学位論文「『保元物語』の研究　――半井本の「語り」における〈理〉と〈哀〉を中心として――」の一部をまとめ直したものである。